

連載

新・種を蒔く人

〈私説〉世紀の大プロジェクト ～豊川用水～

高崎 哲郎 (作家)



第6回「空襲、敗戦、そして豊川用水の原案作成」

ステージ
＜舞台～見るも涙、聞くも涙、戦後の開墾生活～＞



愛知大学名誉教授
牧野由朗

講演する愛知大学牧野元学長(『豊川用水フォーラム開催記録』より)

「戦後、アメリカを中心とするGHQの日本軍国主義の解体と民主化政策を遂行するための課題は、大きく4つに分けて考えることが出来ます。一つは憲法の制定、二つ目は農地改革、三つ目は財閥解体、さらに四つ目は教育制度の変革でありました。

その中の一つ農地改革は、いわゆる封建的な地主・小作関係を打破し、農村の民主化を進めて自作農を創設するという、農業に基礎づけられた日本の軍国主義を根底的に破壊させることでありまして、占領軍はかなりの強制力をもって日本の津々浦々に至るまで徹底的に実行してまいりました」

「戦後の日本にとって最も緊急を要する問題は食糧の増産でありました。国もGHQの支配のもとで昭和20年(1945)11月に『戦後緊急開拓法』を制定し、農業に不適な土地として放置されてきた土地や、軍用地として放置されてきた土地すべてを開拓することになりました。

軍用地としての^{たかしほら}高師原、^{てんぼくほら}天伯原は3000ヘクタール弱のまとまった広大な面積を有し、しかもそれが豊橋市街に隣接すると

いう点で他に類を見ない開拓地として利用されることになったわけでありました。実は両台地は、開拓法が制定される以前に、旧軍人や豊橋空襲で焼け出された人達が入植住まいをしていたということもあり、法制度化後は計画的に、といっても当時のことですから、ずさんなものでありましたが、第一予備士官学校を中心とした旧軍人や復員軍人、豊橋や名古屋の空襲によって焼け出された人達、佐久間ダムの水没者、^{とよね}豊根村(東三河山間部)の次男や三男、南信(長野県南部)らからの入植者など、数ははっきりしませんが2000戸程度に及ぶ多くの入植者があったと思います」

「その殆どが^{ほとん}農業経験のない人達であり、戦後混乱期で経済は、いわゆるヤミ経済、インフレによる物価の高騰、かといって国庫補助がある時代ではなく、そのうえ、労働の対象が農耕に不適な土地の耕作、まず土地改良から始めなければならなかったのですが、その資材もない、といった具合でその苦労は大変なものだったと思います。私(牧野名誉教授)も県から委託を受けてこの地方の戦後開拓の調査に参加いたしました。その実情は聞くも涙、見ることはできませんが、見るも涙といった状況でありました」(基調講演「豊川用水の光と影」の一部、講演者^{まきのよしろう}牧野由朗愛知大学名誉教授(元学長)、平成18年12月16日開催の「豊川用水フォーラム」にて)。

第6回 「空襲、敗戦、そして豊川用水の原案作成」

(以下、『豊川用水史』、『豊川用水』(通水 25 周年記念)、『豊川用水フォーラム開催記録』、『とよはしの歴史』(豊橋市刊)、中日新聞関連記事などを参考にす。地名は原則としてすべて当時、以下同じ)。

「空襲と廃墟」

昭和 19 年(1944) 1 月、政府は大都市に最小限の市民を残し、それ以外の人は周辺都市に疎開することを勧めた。豊橋市でも愛知県の要請によって受け入れに努め、同年 5 月には縁故を頼って来た人たちを中心に 314 世帯を迎え入れた。同年 11 月、サイパン基地を発進した米軍爆撃機 B29 が東京上空に初めて飛来した。昭和 20 年に入って大都会の空襲が激化すると、豊橋市や周辺部の人々の危機感は一層募って疎開する家族が激増した。6 月 18 日の夜中、浜松市が空襲を受け炎上した。その 2 時間後に四日市市が空襲された。次は間違いなく豊橋市の番だと市民はおびえた。おびえは不幸にも的中した。

20 日夜半、市民は突然空襲警報を告げるサイレンで飛び起きた。ラジオは東海軍管区の情報を繰り返していたが、その時はすでに、柳生川運河方面と太陽航空(現イトーヨーカドー)から火の手は上がっていた。それから 2 時間余米軍機による波状攻撃が続いた。136 機の B29 は闇夜に逃げ惑う市民の頭上に焼夷弾の雨を容赦なく降らせた。夜明けまでに焼けるものはほとんど焼け落ち、市街地は焦土と化した。全焼・全壊家屋は全戸数の 70% に上り、死者 624 人、重軽症者 346 人、被災人口は全市民の 50% に及んだ。

悪夢の一夜だったが、焼け出された市民にとっては苦労はむしろそれからであった。有り合わせの衣服をまとい粗末な仮設住宅の暮らしはまだしも、空腹に追われる「生き地獄」の日々が待ち構えていた。

20 年 8 月 7 日、海軍最大の兵器工場である豊川海軍工廠が爆撃にさらされた。マリアナ基地から発進した B29 爆撃機 124 機、硫黄島基地からそれを護衛する F51 戦闘機 45 機は、名古屋方面に向かうと見せかけて知多半島にさしかかった際、機首を突如豊川方面に向けた。

午前 9 時 22 分、空襲警報が発令されたが、工場内では作

業を続行していた。午前 10 時 13 分、B29 の 12 波による波状攻撃と護衛する F51 の機銃掃射が開始された時、工場内には避難しきれなかった多数の工員と学徒動員の学生が残っていた。約 30 分の間に、彼らの頭上には 500 ポンド(250 キログラム)爆弾 3256 発が降り注いだ。

この爆撃により、同工場は元の姿をとどめないほど壊滅的に破壊された。死者 2500 人余とその数倍を越す重軽症者を出した。犠牲者の中には、多くの女子挺身隊員と 464 人の動員学生が含まれている。動員学生の中には 54 人の国民学校児童(今日の小学校児童)も含まれていた。多くの若い命が奪われた。終戦を 1 週間後に控えての惨事であった。すべてが破局に転落する中で、8 月 6 日広島に、次いで 9 日に長崎に原子爆弾が投下された。8 日にはソ連が突然参戦した。闘うすべてを失った日本はポツダム宣言を受諾し、連合軍軍に無条件降伏した。20 年 8 月 15 日正午、全国民は昭和天皇の玉音放送を通じて日本敗北を感知した。多くの国民は戦争の終わった解放感とともに行き先に対する不安の交錯する複雑な気持ちを整理することで精一杯であった。

「敗戦後の開墾生活：苦難の道」



柿原春次氏(『豊川用水』より)

戦後の日本は、食糧事情の悪化と失業者の増大、これに伴う経済危機の深刻化によって、社会機能はマヒ寸前であった。昭和 20 年(1945) 11 月、政府は「緊急開拓実施要項」を決定した。これにより、愛知県の東三河地域において柿原春次氏(元豊川総合用水土地改良区理事長)も高師・天伯原をはじめいくつかの開拓地で新農村の建設を進めた。西半分の高師原工区には軍人、軍属を中心に入植し、東の半分にあたる岩西工区には主に北設楽郡豊根村からの農民らが入植して開墾を始めた。

戦後の初期入植者である柿原春次氏は苦難の日々をインタビューに答えて追想する。(『豊川用水』より)。



「食糧の増産といっても、本来、この地区は農業には不向きな所だったんです。というのもこの辺りの土壌は強い酸性で、しかも長年、軍隊(陸軍)の演習場として踏み荒らされたせいで堅く、痩せてしまっていたんです。

酸性土壌を改良するために炭酸カルシウムを買って撒いたり、肥えた土にするために国鉄(現 JR)と交渉して貨車で、名古屋や浜松などからゴミを運んでもらったが、肥料になる有機質と瓦礫を選別するのが大変な作業でした。選別した有機質を畑に入れたりしたが、それでもなかなか生産性を上げることができなかった。

なんとか収益があげられるようになったのは昭和 29 年か、30 年頃からだったと思います。それまでは 1 斗 5 升(1 斗は 18 リットル、1 升は 1 斗の 10 分の 1)の麦の種を蒔いても、3 升ぐらいいかえらず、サツマイモも落花生ぐらいの大きさにしか成長しなかった。

働けば働くほど借金が増えて行くありさまで、入植した人の中には 5 年で開墾する条件を満たすことができなくて、出て行った人も多くいました。特に手に職のある人は早く出て行き、現在残っているのは 3 分の 1 ぐらいでしょうか。

土壌が農業に適していないこともさることながら、この辺りは雨が少なく、それも必要な時期に降ってくれません。幸い私のところでは井戸を掘って水が出たからよかったです。出ないところでは桶を担いで近くの川に水汲みに行ったものです。

開墾も普通の鋤では能率が悪いものだから、先の広がった開墾鋤を使ってやるんですが、もともと私は農家の出じゃありませんから、一日鋤をふるうと指が硬直して開かないんですよ。とにかく貧しく、苦しい開墾生活でした」

3000 ヘクタールという広大な開墾地が豊橋市の近くに広がっていても、土壌が強い酸性のうえに痩せていては、生産性



初期開拓者の住宅(『豊川用水史』より)

を上げることはとても無理であった。

渥美半島では、旧福江町西山地区(現田原市福江)で 1400 ヘクタールの開拓が行われた。戦時中、伊良湖岬は陸軍の試砲場で民間人は立ち入ることはできなかったが、戦後開拓地として一般に解放された。ここは海岸の流砂が堆積してできた地形であり、砂地ばかりの土地で井戸も掘れず水の確保は困難を極めた。真夏には地表温度が 60 度にも達し、真冬は強い北西の季節風で砂が飛ぶ荒涼地で、開墾するにも手の施しようがなかった。

「動き出した用水計画」

敗戦後まもない廃墟の中、昭和 21 年(1946) 5 月、愛知県経済部耕地課は戦前の昭和 5 年と同 7 年に農林省(当時)が立案した大規模開墾計画(豊川用水計画も含む)をとりあげ再検討して計画の概要を作成した。計画によると、開田面積は軍用地の開墾面積中、開田可能地約 800 ヘクタールと新たな前芝地先(現豊橋市)の干拓地 200 ヘクタールを加え 6600 ヘクタールとなった。既設の水田の用水補給と開畑もそれぞれ増加した。これらの結果、計画面積は 1 万 1350 ヘクタールに拡大した。

このため開田や用水補給の増加した面積約 1750 ヘクタールの水源の確保は困難となった。「宇連ため池(ダム)」の築造の他に新規に水源を求め、次の 3 案が検討された。

- ① 天竜川の支流振草川を水源とし、北設楽郡下川村より同郡三輪村地内の三輪川に隧道(トンネル)約 35 キロをもって連絡補給する。
- ② 豊川支流寒狭川上流島田川の南設楽郡鳳来寺村大字塩瀬附近にため池を築造する。
- ③ 三輪川の支流黄柳川で八名郡山吉田村地内の適所にため池を築造する。

水源となる宇連ダムだけでは水資源が不足することから、新たな水源として天竜川水系の水を豊川水系に導くことを計画したのである。

愛知県は計画の調査を円滑に推進するために、東三河地域の関係市長村長(渥美郡 12、八名郡 5、宝飯郡 5)に通達を出し協力を要請した。同年 8 月、県は現地調査班(高瀬英一、山

第6回 「空襲、敗戦、そして豊川用水の原案作成」

田千里、柴田米二、今尾正高、大橋広)を編成して山岳地での調査を開始した。新たな水源(天竜川水系)をはじめ、取水口の位置、東西分水工と幹線水路の位置など広範囲の調査が行われた。1か月で調査は終了し、その成果を「愛知県渥美・八名・宝飯三郡大規模開墾並農業水利事業計画書」として発表した。事業計画では、愛知県の隣県である静岡県を流下する天竜川水系の一部流域変更を水源計画に採用していることが注目された。計画の関係面積は1万400ヘクタール、総事業費は3億円(当時)であった。

愛知県では、計画概要の発表後に地元の市町村に対して期成同盟会を結成するよう働きかけた。地元の強い要望がなければ事業の実現はおぼつかないとの判断である。同時に県知事青柳秀夫は農林大臣和田博雄に「同事業を国営(国家予算)で調査・実施するよう」申請した。

「期成同盟会結成と農林省調査」

昭和22年1月14日、豊橋市長横田忍を会長とする「東三地方(東三河地方の意)開発期成同盟会」が結成され、事務局を豊橋市役所に置いた。期成同盟会は豊川用水事業を実現する運動の母体となる。同盟会は政府関係省庁への情誼を尽くした陳情や綿密な連絡をはじめ、受益地に対する果敢な啓蒙活動にも重点を置いた。

<東三地方開発期成同盟会役員名簿>

会長：豊橋市長横田忍

副会長：渥美地方事務所長鈴木新一

常任理事：豊川市長福山政一、宝飯地方事務所長浅野辰夫、八楽地方事務所長原田茂治、北楽地方事務所長宇野辰雄

理事：宝飯郡前芝村長加藤六蔵、八名郡石巻村長本多継四郎、南設楽郡町村長代表渡辺由助、豊橋市農業会長大竹藤知、豊川農業会長竹川貞治、渥美郡農業会支部長藤代佐一、宝飯郡農業会支部長竹内司

期成同盟会は結成と同時に次のような運動方針を確認した。

- ① 豊川農業水利事業の促進運動
- ② 政府関係省庁への陳情及び連絡
- ③ 民衆の啓蒙を重点とし、関係の郡・市町村の相互連絡

昭和22年中の政府関係省庁(農林省、経済安定本部など)や衆参両議院への陳情は5回に及んだ。期成同盟会にとって活動資金をいかに調達するかが、重要な課題の一つであった。強力な運動を展開するには、どうしても多額の資金が必要であった。だが、農民から直接負担金を徴収することはきわめて困難であった。同22年2月18日、豊川市役所で理事会を開き、資金の調達方法について協議した。その結果、資金は市町村の負担とすることに決定した。当時の市町村の耕地面積より考えると、ほぼ耕地面積に比例して拠出金額が決められたようである。



東京への陳情団(『豊川用水史』より)



愛知県と地元東三河地方の気運が高まり、事業に対する推進運動が活発になると、さらに本格的な調査が必要となり、県耕地課では同22年2月再度調査班を編成して現地調査を開始した。

一方、4月になると、農林省京都農地事務局事業部からも技師佐野鏗爾を班長とする調査班(技官太田照次、同松井虎太郎、同山田信雄ら)が派遣され、県との合同調査となり11月にその結果がまとめられ計画原案(「愛知県渥美・八名・宝飯三郡大規模開墾並農業水利事業」)が発表された。

調査班の班長を務めた佐野鏗爾は、当時の思い出についてインタビューに答えて回顧する。(『豊川用水』より)。

「食糧難の時代のことでですから無論、食べ物には苦勞しました。調査などは最寄りの駅、例えば水源地域は飯田線の三河長岡駅(現東栄駅)に、南は渥美線の田原駅に自転車を預けておいて、そこから自転車でまたがって行くわけですから効率が



悪かったですね。

今となっては許される話でしょうが、交通が不便なため、調査に出ると現地で宿泊することが多かったのですが、30円や50円の日当ではとても宿屋に泊ることなどできなかったの、一人に一人ずつ「幽霊人夫」をつけて請求したのです。ところが誰かに密告されて、ひどく怒られました。しかし事情を話したところ、翌年(昭和23年)にはインフレもあったでしょうが、1日400円もくれるようになりました。

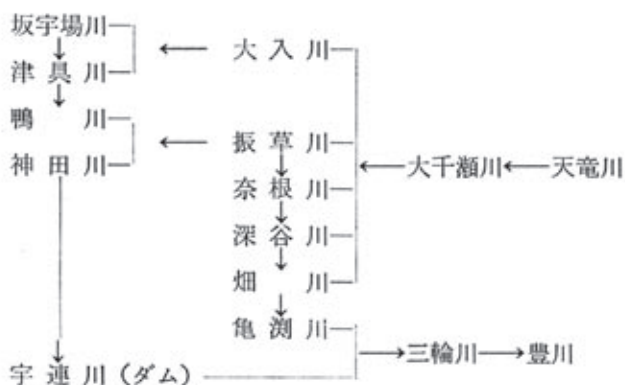
昭和23年に行われた万場池の調査の時には、前日、打っておいた杭が抜かれているんですね。地元の反対運動だと思っていたんですが、よく聞くと、そこは池を造るには不向きな土壌で、以前にも池を造ったが、ザルに水を流し込むのと同じように、いっこうに溜らなかったということなんです。

そこで、どこかいいところがないかと聞くと、あるから案内してやるというので、地元の人たちと暑い夏の日、自転車にまたがって見に行きました。

そして場所が決まると、それまで人夫にと頼んでも出てくれなかった人達が協力してくれて、おまけにうどんや野菜などを差入れてくれました。やるからには徹底的にやるというのが三河人(かたぎ)気質なんですね。

調査終了後にはじき出した事業費が21億6000万円だったのですが、それでは多い、1週間で15億円にしろというので、その変更作業に大変苦労しました(事業費はさらに削減される)。佐野は後に愛知用水公団(水資源機構前身)豊川用水事業所長に就任する。

「計画原案の作成」



流域変更取入系統(『豊川用水史』より)



流域変更略図(『豊川用水史』より)

計画の目的は、食糧の増産と失業者の救済にあった。そのためには、水資源に恵まれない豊川流域と渥美半島全域に水を供給し発展させることで、事業では既耕地の用水不足田、開田地、干拓地を合わせた1万406.3ヘクタールの用水を確保することであった。

総事業費11億円の計画原案の概略を簡単に記すと、まず懸案であった水源水量の不足の打開策は、流域の変更を考えた。変更後の流れの一つは、坂宇場川→津具川→鴨川→神田川→宇連川(ダム)→三輪川→豊川、もう一つは振草川→奈根川→深谷川→畑川→亀淵川→三輪川→豊川である。

宇連ダムの築造地点は北設楽郡三輪村(現南設楽郡鳳来町)大字川合の村落から上流約2.4キロの地点で、ダムの堤高65.5メートル、貯水量3427万6220立方メートル(トン)とされた。

補助ため池については、渥美郡の二川町に反茂上池、高豊村に赤沢池、高豊・老津村に深山池を新設し、野田村の芦ヶ池を増設するとしている。

頭首工については、八名郡大野町の下流約1.9キロの地点に大野頭首工を設けて取水し、三輪川左岸に沿って舟着村日吉

第6回 「空襲、敗戦、そして豊川用水の原案作成」

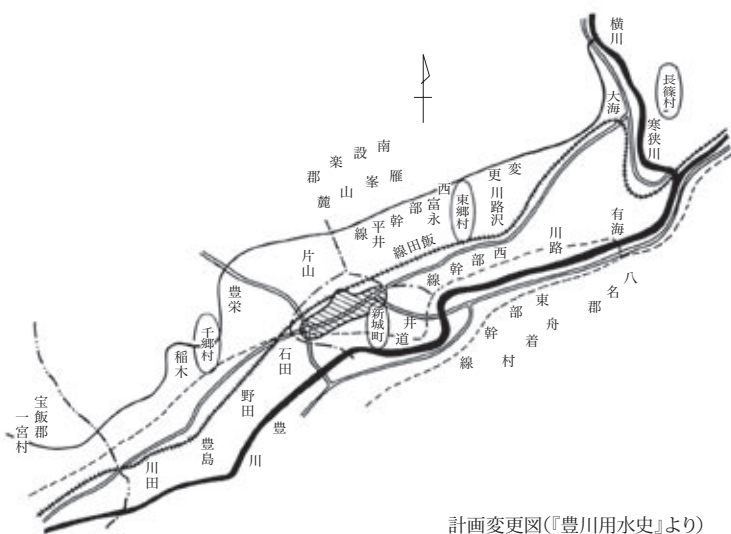
地内までの延長 5.3 キロを隧道(トンネル)で導き、ここで東西幹線水路に分水する。

豊川をサイホンで越して来た西部幹線水路は東郷村、新城町、千郷村、宝飯郡一宮村、豊川市を経て音羽川で終わる延長約 30 キロである。

東部幹線水路は舟着村日吉から富岡を迂回して石巻村に入り、豊橋市、二川町を経て、国道 1 号線と東海道本線をサイホンでくぐり、渥美半島の南岸丘陵地沿いに走って伊良湖岬の先端までいく延長約 90.5 キロとされた。構想から 25 年、4 半世紀後に誕生した計画案であった。



農業水利事業の計画原案(農林省案)が発表されると、西部幹線水路地域の地元関係町村(南設楽郡長篠村、東郷村、新城町、千郷村)から直ちに愛知県知事青柳秀夫と農林大臣平野力三に対して取水地点の変更を求める要望が出された。取水地点を三輪川ではなく、寒狭川下流の横川地点(滝川発電所)の位置に変更して欲しいとの要望であった。この変更によって、雁峯山麓一帯の受益地が約 3 倍に増大し、利益が大きいのという理由であった。しかし、この要望は下流にある牟呂・松原両用水の水利組合との同意が必要であり、寒狭川の流量のみでは不足するため、新たに上流部にダムを造らなければならない。さらに滝川発電所との関係から、それは困難だと判断された。その後、大野頭首工の位置を上流 1 キロの地点に変更することで解決された。



計画変更図(『豊川用水史』より)

「計画見直しと畑地灌漑導入」

国の計画原案が作成され発表されると、愛知県と東三地方開発期成同盟会は、昭和 23 年(1948)度中に事業が着工されるように農林省はじめ大蔵省(当時)や経済安定本部などに働きかけた。だが、総事業費 11 億円という大規模な事業がたやすく認可され得るものではなかった。そこで県では計画を 2 期に分割して、第 1 期は事業費 3 億 2000 万円で、比較的資材のかからない天竜川水系の流域変更と西部幹線水路の事業に当て、第 2 期は宇連ダムなどの大規模工事とした。

しかし敗戦後の物価の高騰から事業費の増大が見込まれ、当時の国家予算では、余りにも重荷となることから再度大幅な見直しが行われた。

見直しは事業費のかかる水源施設に主眼がおかれ、費用をいかに軽減するかが課題であった。この難問に対して、当時農林省建設部長であった溝口三郎は示唆した。

「水田として開墾する一部を畑地にしたらどうか」

彼は畑地灌漑を導入してはどうかと考えたのである。水田が畑地よりも水を使うことから畑地に変更した分、灌漑に使う水量が少なくて済む。使用水量が減ると、それだけ水源水量も少なくて済み、例えば宇連ダムにしても溜めておく水量が少なければ、それだけ施設も小さくて済み、建設費の削減につながる。

当時、畑地灌漑は联合国軍総司令部(GHQ)の天然資源局(N.P.S)の勧告により、注目を浴びつつあった。かねてより畑地灌漑を研究していた東京大学農学部教授秋葉満寿次は、その成果を神奈川県相模原開田計画に導入していた。

溝口の示唆を受けて開田予定面積のうち約 2400 ヘクタールを畑地灌漑に切り替え、昭和 24 年 1 月から 1 か月をかけて愛知県と農林省京都農地事務局は、とりえず国営で施行する水源施設と幹線水路の事業計画を再度練り直した。その結果、案出されたのが次の 3 案であった。

A 案：ため池、河水併用計画

宇連ため池(ダム)は堤高 48 メートル、有効貯水量 2208 万立方メートル(トン)、灌漑期間は計画原案通りとし、天竜川水系の流域変更によって毎秒 11.6 トンを豊川水系である三輪川に導水する。補助ため池については、渥美半島に反茂上、赤沢、芦ヶ池を築造する。



B案：ため池分設計画

天竜川水系の流域変更は行わず、A案通りの宇連ため池の他に、寒狭川に堤高50メートル、有効貯水量1600万トンの田口ため池を築造する。両ため池から放流された水は、それぞれ三輪川、寒狭川を自然流下させ、三輪川は大野町地内、寒狭川は鳳来寺村布里(横川発電所取水^{えんてい}堰堤)で取水し、豊川の左右兩岸を別々に灌漑する。補助ため池に関してはA案と同様とする。

C案：単一ため池計画

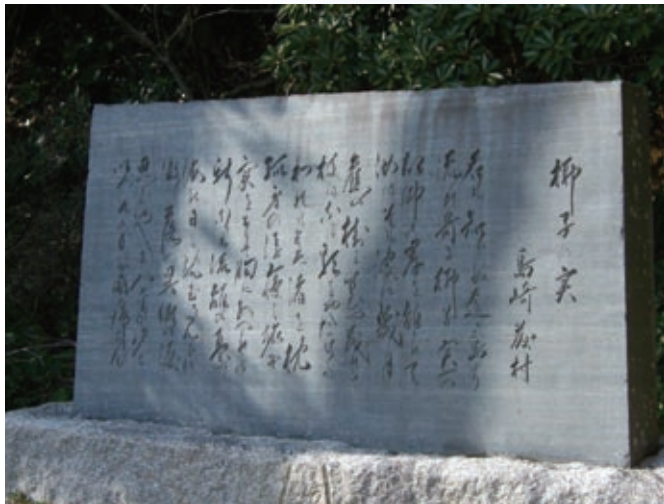
宇連ため池はA案通りにし、天竜川の流域変更は、その支流である鴨川と振草川の合流点の下流約600メートルに取水堰を設け、河水の一部を隧道(トンネル)で神田川に導き、さらに^{みどの}御殿村引田地内に取水堰堤を設けて調整池として利用しつつ、圧力隧道で宇連ため池に導水する。

宇連ため池から放水した水は、大野町地内で取水し、A案と同じように東西両幹線に分水する。補助ため池は前案と同様とする。

この3案を検討するため、昭和24年4月8日、農林省京都農地事務局に役人や学者ら関係者が集まり、「豊川総合開発計画技術委員会」が開催された。その結果、A案は流域変更に対して静岡県の同意を得ることが困難であり、また溪流取水は技術的に管理が難しく、B案の田口ため池の建設は鉄道、県道などの付帯問題の解決が短期的に困難であるという理由から、C案が採択された。このC案をたたき台として、当初計画が9月に確定し、同事業は差し当たり400万円の国家予算をもって着工される運びになった。

<付録><椰子の実^{やし}>記念碑(伊良湖岬)

明治31年(1898)夏、後年民俗学者となる大学生柳田國男(1875-1962)は、渥美半島の先端にある伊良湖に1か月半ほど滞在した。この時恋路ヶ浜でたまたま見つけた椰子の実について親友の詩人島崎藤村(1872-1943)に語った。藤村は南洋から流れ着いた椰子の実にインスピレーションを受け、流離の悲哀を歌った「椰子の実」を作詩したとされる。昭和11年(1936)、大中寅二によって作曲され、「国民歌謡」として全国に放送されて国民的愛唱歌となった。記念碑が恋路ヶ浜の広い海原に向かって立っている。



「椰子の実」の詩碑(伊良湖岬)

椰子の実(島崎藤村)

名も知らぬ 遠き島より
流れ寄る 椰子の実ひとつ
故郷の岸を はなれて
汝(なれ)はそも 波に幾月

^{もと}旧の樹は 生いや茂れる
枝はなお 影をやなせる
我もまた 渚を枕
ひとり身の 浮き寝の旅ぞ

実をとりて 胸にあつれば
新なり 流離の憂い
海の日 沈むを見れば
たぎり落つ 異郷の涙

思いやる 八重の汐々
いずれの日にか 国にかえらん

(つづく)

＜歴史散歩＞ 豊川用水・水源地：新城市に行く しんしろ

～ 織田・徳川軍が鉄砲で圧勝した
長篠城・設楽が原の古戦場～ したら

グ ラ ビ ア
とよがわようすい
豊川用水
toyogawa Canal



長篠城跡
武田軍の包囲戦に耐えた城



ながしのがっせんずびょうぶ
長篠合戦図屏風 (徳川美術館蔵)

絵図中央連吾川①左が馬防柵を楯に鉄砲隊の織田・徳川連合軍②に織田信長、③に羽柴秀吉、④に徳川家康、右に騎馬隊の武田軍が対峙⑤の長篠城包囲戦から侵攻⑥に武田勝頼。(ときは 1575 年 5 月)

豊川用水は、⑦の地点で豊川を渡り、左方向に徳川家康陣④の下方の脇を左斜め方向に通過する。

長篠城の下で豊川に合流するは、豊川用水を取水する宇連川⑧で 450 メートル上流に大野頭首工(堰)がある。



先鋒の徳川家康陣跡、右上写真の豊川用水左脇の丘陵に奥方を向いて武田軍に対峙する。(合戦図④の位置)



れんご
連吾川(中央・上流を望む)を挟んで左に織田・徳川連合軍、右が武田軍の戦陣、左奥に武田騎馬隊を制した馬防柵が見える。(合戦図①付近)



武田勝頼陣跡、甲州鞍馬石で建立された顕彰碑(合戦図⑥の位置)
この戦の7年後(1582年)、国主500年の武田家が滅亡となる。

「長篠合戦図屏風」写真を提供頂いた徳川美術館は、名古屋市東区徳川町(徳川園内)にある、財団法人徳川黎明会が運営する美術館です。国宝「源氏物語絵巻」、大名家の遺品など数多くを収蔵、展示しています。